

事後評価（慶應義塾大学）

総合評価	コメント
A	<p>以下の点から「想定された成果を上げており、将来計画に基づく事業終了後の発展が期待できる」と判断した。</p> <ul style="list-style-type: none">○客観的な指標の推移について、科学研究費助成事業における研究者当たりの採択数及び配分数、Q値、国際共著論文の割合が順調に推移するなど、全体として指標が伸びている。○補助事業期間中の活動について、大学全体を俯瞰したURAの役割、組織強化が課題として残っているが、大学独自のスタイルのURA体制が整備され、外部資金獲得や国際共著論文作成、若手研究者育成等に役割を果たしたほか、国際共同研究契約の交渉・締結や安全保障輸出管理等の業務における体制強化などのアウトカムを得ている。○補助事業終了後の将来計画について、「自律的・自立的に成長する研究大学の実現」という明確なビジョンを掲げ、従来の事務職員URA及び専門員URAに教員職URAを加えた新たなURA制度を整備して、キャンパス横断的・全学的観点からの研究支援を強化するとともに、外部資金によって大学独自基金を造成・運用することで財政的自律を進め、文理融合・領域横断研究を推進するなど、これまでの活動実績を踏まえた優れた内容となっている。URAの組織強化、スキルアップ、役割の明確化等を一層進めることにより、多くの大学のモデルとなることを期待する。

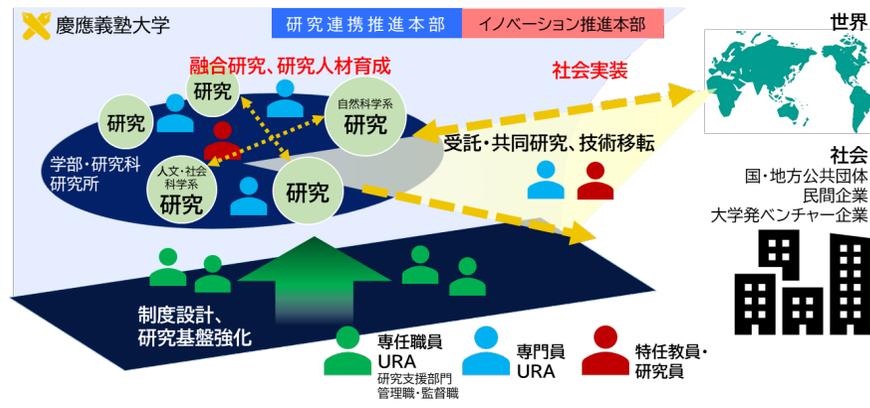
「研究大学強化促進事業」における 成果概要 慶應義塾大学

目的 慶應義塾の「実学」の精神により

国内外から卓越した研究者・優秀な学生が集まり、自律的・自立的に成長する研究大学へ

これまでの実績・取組状況

慶應義塾型URA群 ～「教・職一体」による研究活動の国際展開を目指す



1 学内の融合研究の支援

✓ 研究者情報DBの継続的改良、分野横断の研究の場である先導研究センターとKGRIの統合による融合研究推進の加速。研究者交流のための多様なイベントの開催

2 次代の高度研究者の育成

✓ 新学術領域・学術変革領域獲得のためのアドバイザー制度。国際学術論文掲載補助を150%拡充
✓ 若手研究者支援制度の改良・新規策定

3 国際共同研究の支援

✓ URAの海外研修や契約書雛形見直しによる研究支援体制の国際化推進。研究成果の国際発信強化。安全保障輸出管理体制など国際共同研究に関する各種ルール整備

4 産学官連携、技術移転の促進

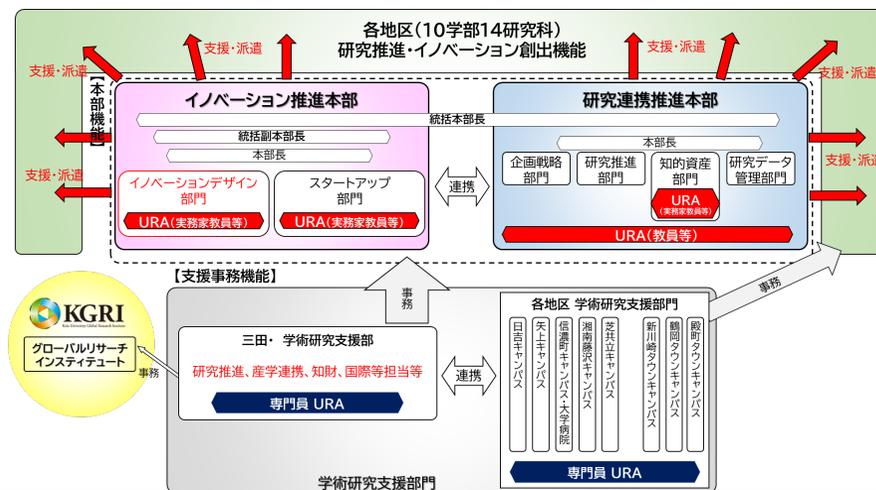
✓ 知財担当専門員URAによる技術移転の促進、産学官連携・スタートアップ支援のためのイノベーション推進本部の設置とイノベーション・エコシステムの構築

5 研究マネジメント支援体制整備

✓ 研究事務のデジタル/オンライン化推進による研究時間の確保とコンプライアンス強化
✓ 研究者の育児支援制度の整備。科研費申請書のピアレビューの実施。

今後5年間の将来計画

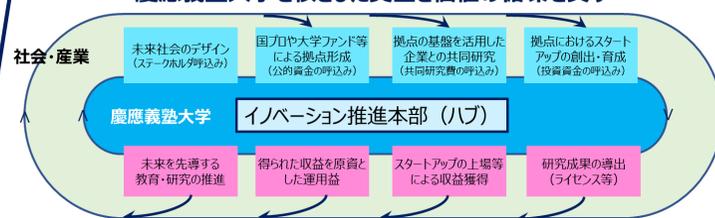
「新慶應義塾型URA群」による世界を先導する研究大学の実現
さらなる組織改革とURAの進化・拡充



➢ 研究連携推進本部/イノベーション推進本部に実務家教員等を中心としたURAチームを配置し、本事業における専門員URA制度と一体化した新慶應義塾型URA制度を構築

➢ 両本部の体制・機能強化～研究成果による社会貢献と研究力強化のための財源の多様化・財務基盤強化とを同時に実現

慶應義塾大学を核とした資金と価値の循環を興す



➢ KGRIに世界トップレベルの研究拠点形成機能を備える
➢ 「新会計Dxプロジェクト」による研究事務処理の簡素化、研究者の研究時間確保、コンプライアンスの実現
➢ 新施策実行のためのトップダウン予算の拡充(間接経費の法人管理分の最適化)